

平成15年10月9日

## IPCC 第2回スコーピング会合 (WG1) 出席の感想

地球フロンティア研究システム 松野太郎

2007年に予定される IPCC AR4 に盛り込むべき内容の大筋(具体的には章立てやその中の節で扱う内容)案を決定すべく標記の会合が行われた。当出席者は、初日及び最終日の全体会合の他は科学と予測に関する WG1 に参加した。決定された第4次報告書の構成(案)は別添の資料の通りである。

第1回スコーピング会合で作られた構成素案をほとんど変える事なく、肉付けしたというのが実際の所である。

当出席者は第1回会合に出ていなかったため事情が分からないが、その際作られた素案で「炭素循環」についての章が無くなっている(第3次までは重要なものとして独立の章を成していた)のに驚き質問したが「別の幅広い問題を扱う章(炭素循環の他、大気組成と気候変化の関係などを扱う)の中に取り込んであるから良い」というのが議長はじめ多くの意見であった。森林による CO<sub>2</sub> の吸収は京都議定書でマイナスの放出としてカウントして良い事になっているにも拘わらずその科学的根拠が不十分な事、一方第3次報告書以後の研究成果に見るべきものが多いことから一つの章を割くべきかと思っていたので主張したが通らなかった。更に、指名招待された研究者の中に炭素循環の専門家が見当たらないのも不思議で、従ってこのような結末になるのも止むを得ない。

もう一つの大きな特色は実際観測されている気象・気候をはじめ海氷、氷河など地球環境の変化の記述に3章を当てる程重視している事である。確かに IPCC 報告書は「研究成果のまとめ」ではなく、社会(一般の人々と政策決定者)に対して科学的知見を伝える事、特に社会が現在求めている質問に答える事が主要な役割である事を考えると、昨夏のヨーロッパの記録的洪水、今夏の同じくヨーロッパの猛暑、更に日本の冷夏など極端な異常気象の頻発に対して「果たしてこれは地球温暖化の影響なのか?」という問いが発せられている事は分かる。それに精一杯答えるのが我々の責任であるとは思いますが、最も難しいこの問いにどれだけ答えられるか、いささか心配であった。IPCC 報告の原則として、専門学会誌に発表された(認知された)論文に基くまとめをするがそれ以上の事はしない(執筆者自らの判断はしない)のだから、ここ1-2年内までに出る膨大な個別現象の報告を網羅して整理しまとめることができるのだろうか。一方、その原因が温暖化にあるか否かを論じる有力論文がそんなに出るとは思えないので肝心の社会の問いには答えられないのではないかと。などなど心配される。共同議長(の一人) Susan Solomon 博士は会合の進行に当たって強いリーダーシップを発揮し、そうでないとまとまらないのかも知れないが、やや強引との印象を受けた。